
美しい鼻血

子々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美しい鼻血

【Nコード】

N8426C

【作者名】

子々

【あらすじ】

僕は虐待を受けている少女哀子と出遭った。そして、ある計画を持ち出す……。それは、大人への復讐。はじめはただ、切りつけるだけだった。しかし、人がひとり死んだとき、事態は思わぬ方向へと進んでいく……。

プロローグ（前書き）

原稿用紙に書いたもので、読み難い箇所があると思いますが、
予めご了承ください。

過激な表現はありませんが、血とかは出ますのでご注意ください。

プロローグ

ある昼下がりに、タクシーに乗り込んだ青年はみすばらしい身なりをしていた。不精髭を生やし、ジャケットの下に着ている白シャツは泥で汚れていた。タクシーの運転手はバックミラー越しに男を一瞥して、ぼそりと呟かれた目的地へ向けて車を走らせた。

走行中、男はタクシー内に提示された注意書きから目を離さなかった。見かねた運転手が、どこから来たのかを尋ねると、男は虚ろな目をしたまま、戻ってきたんだ、と微笑を浮かべて呟いた。

「一人かい？」

「そう見えますか……」

「見えるも何も、現にお客さんは一人だ」

笑う運転手とは裏腹に、男はぼっかりと空いた隣の座席を物寂しげに見つめ、バックミラー越しに運転手へと視線を移した。

「この事件って、こういったものなんですか？」

男は助手席の背もたれから垂れ下がっている紙を指さして尋ねた。運転手は、その通りだよ、と答え、しばらく黙した。

運転手が口を開いたのは、それから六分後だった。

「最近この辺りで無差別に人が切られる事件が起こっていてなあ……」

男の表情が少しばかり陰しくなった。

「数年前に起こった事件、兄ちゃん知ってっか？ 少年リッパーって殺人鬼の。あれが復活したんだとよ」

男は小さく舌打ちをした。

男が降りた先は荒地だった。

腐りかけた雑草が生い茂り、その箇所だけが別空間のように殺風景に存在していた。男は倒れて腐ってしまっている看板を踏みつけて、囲いを乗り越え、空き地へと入った。

風が男の前髪を躍らせる。黄昏の眼差しをある一点に向けながら、男はしばらく泣いていた。そして、顔が腐るほど泣いた後、ポケットから一つのナイフを取り出し、固く乾燥した土の中へ埋めた。そしてまた、男は一筋の涙を頬に伝わせた。

第1章 ゴミを漁る宇宙人（前書き）

少しばかり流血がありますので、苦手な方はご注意ください。

携帯からご覧の方は、文章が所々読みづらいと思います、すみませ
ん…。

第1章 ゴミを漁る宇宙人

親愛なる「AI」へ

君はよく溜息を吐き、頭を抱えて何かを悩む。僕はその様子を見るたびに、胸が締め付けられるような感覚がする。君をこんな風に悩ます、この世の中がいけない。だから、僕は立ち上がるよ。君のために。僕は君を守るために立ち上がる。君のために。君を守るために。僕は立ち上がると思う。

「人間は生きるためだったら何だってやる醜い生き物さ。それは強盗だったり、援助交際だったり、羞恥を晒すことだったり、もしかすると人を殺すことかもしれない。それは人によって異なるが、生きる手段は二通りしか存在しないんだ。自分を傷付けて生きる方法と、他人を傷付けて生きる方法の二つだ。人は前者か後者かに分けることが出来る。そう、結局闇から逃れて生きることなんて出来ないんだよ」

はつきりと記憶はない。顔すら思い出せない。だけど、男は僕の頭を大きい手で撫でながらそう言った。嘲笑うような声で、僕を笑った。僕は言った。

「じゃあ、人は人を傷付けてもいいんだね？ 仕方がないことなん

だね？ だったら僕、生きるよ！ 生きてみるよ！ ありがとう、おじちゃん」

男は、何度も深く頷いて、

「ところで、君はこの子だい？」

小首を傾げて僕に訊いた。

僕の部屋の窓からゴミ捨て場が見える。

そのゴミ捨て場に週に一、二度やって来る一人の女の子は誰が捨てたかも分からないゴミ袋を破き、中身を漁っていた。僕はその光景を部屋の窓からジッと見つめ、少女が近所の誰かに見つかり、殴られる様子をひたすら想像して遊んでいた。しかし、この辺りに住む人々は夜中には滅多に出歩かないため、この醜い少女を殴りつける者はいなかった。

僕は押入れの中で、膝を抱えて少女のことを考えるのが日課だった。少女はどうしてゴミを漁っているのだろう、少女は何者なのだろう、少女の血は何色なのだろう。

僕の中では、少女は未知の生物のようだった。どこか別の星からやってきた宇宙人が、人間の中に溶け込むために格好だけを似せてみたが、人間の生き方が分からない。自分の星に帰りたいと願うけれど、宇宙船が迎えに来てくれない。仲間に見捨てられた宇宙人は、それでも置いてきぼりにした仲間を待ち、人間の中で、訳も分からずに生きている。僕は釘で、押入れの壁に宇宙人を削り書いた。

それから僕は押入れから出て、リビングへ行った。手探りで電気

を点け、躊躇いながら蛍光灯は光りを灯した。食器棚の隣にある、茶色い棚のひきだしを開けると、蛍光灯の光りを受けて光沢を放つハサミが口を閉じて僕を見上げていた。いつもこの瞬間に心臓が鳴り始める。このとき、僕は自分が生きているのだと自覚する。ハサミを手にとると限界まで刃を開き、ゆっくりと自身の人差し指の腹に置き、スーッと手前へスライドさせた。一瞬、ビリッと電流が走ったような痛みがし、顔を歪めた。それからは何の痛みもなく、瞑った瞼を上げて、人差し指を見た。人差し指の腹はぱっくりと割れ、まるでファスナーを開けたように皮膚同士が離れていた。血がどろりと窮屈な僕の身体の中から解放され、溢れだす。僕は小さく安堵の吐息を漏らして、救急箱の中から絆創膏を取り出し、血をティッシュで拭ってから貼りつけた。リストカットをする勇気も、アームカットをする勇気も、死ぬ勇気も僕にはなく、単なる自己満足の自傷行為だ。

父親が帰ってくる前に部屋へ戻り、時計を確認して窓の外を見た。少女はすでにゴミ捨て場にいた。近所の人はカラスの仕業だと思い、錘を付けた網を掛けたらしいが、それは勿論意味をなさない。

少女は丁寧に結び目を解いてゴミを漁っていた。僕はその様子を眺め、学校帰りに拾っておいた直径三センチ程の石をポケットから取り出した。窓を開けて、無我夢中でゴミを漁っている少女目掛けて思いつ切り投げると、思ったよりも小さな鈍い音を立てて、少女の頭に命中し、跳ね返った。少女は頭を抑え、がくんと体勢を崩した。僕は慌てて、カーテンを閉めた。それと少女が振り返るのがほぼ同時だったため、顔を見ることはなかった。

「君は、宇宙人なんですよ？」

そう訊くために、次の週の深夜の一時頃、僕は小走りで家の方へ

向かっていた。その日はぽつんと月が独りぼっちで浮かぶ、肌寒い日だった。

大きな闇に飲み込まれたアスファルトの道路に、ぽつり、ぽつりと赤い絵の具のような血液が点々と痕を残していた。生気を失いかけた街灯に照らされたそれは、赤々と栄え、すぐにその血液が少女のものだと直感した。街灯の生気をその血液が吸収しているように、生き生きとした血だ。僕はその場にしゃがみこみ、血液の中へ人差し指の腹を浸した。ぬるい。僕はごくりと唾を飲み込んだ。少し固まりかけた血を、指に付けて、自身の目の前まで持っていき、じつくりと眺める。血の色を見る限り、僕と同じのようだ。

しばらく観察していると、一口味見をしたい衝動に駆られたが、僕はかぶりを振り、止めておいた。僕は異常者ではないつもりだし、吸血鬼でも蚊でもない。指先に付いた血を親指と人差し指の腹で擦り合わせ、指紋の繊細な線の隙間にねじ込み、ポケットの中へ滑りこませた。

血液は案の定、ゴミ捨て場へと続いていた。もしかしたら、そこにいるのはいつもの少女ではなく死体かもしれない。それだと少しショックだ。だけど、それが少女の死体なら僕は喜ぶだろう。更にそれが、迎えの来ない仲間に絶望し、自ら命を絶ったのだとしたら。そう考えると、僕の心臓は速さを増すばかりで落ち着かせることが出来なかった。

ゴミ捨て場にはいつも僕が見ている姿があった。まるで憧れていた映画の世界に入り込んだような感覚だ。少女は僕の存在に気付くことなく、ただひたすらにゴミを漁っていた。少女はボロボロに汚れた服を着て、髪が無造作に四方八方に飛び跳ねていた。血液は彼

女の腕から流れ落ちたもののようだ。その箇所だけ赤く染まっている。

「何してるの？」

少女が気付くまで黙って観察しておくつもりだったが、声が無意識に出てしまった。少女がゴミを漁っている理由が判明したからだ。僕はどうせ何か使えるものでも持って帰っているのだろうと思っていたが、それは的を外れていた。

少女はゴミを食べていたのだ。それも、まるで豪華な食事でも頬張るように、何の躊躇もなく、ガツガツと口の中に入れていた。少女は僕の方を向き、隈の出来た虚ろな目を丸く見開いた。唇は荒れに荒れて、血の塊をつくり、鼻血が滴っていた。

失敗した、と思った。

少女はれっきとした人間だ。僕の理想像がガラガラと音を立てて、一気に崩れた。この少女は、孤独を苦とも思っていない。

「そんなの食べたら死ぬよ？」

少女は警戒心をむき出しにした瞳を僕に向け、唇を噛みしめた。歯が唇に食いこんだらしく、血が流れた。この少女は至るところから血液を流すのが好きらしい。僕がみる限り、三箇所から血が垂れ流しになっていた。

「しょっちゅうここに来るよね。僕、あそこから君のこと見ていたんだけど……。気付いてた？」

自分の家を指さして言うと、少女はそっちへと頭をぐりと回し、

しばらく僕の部屋の窓を見ていた。そして、石のことを思い出したらしく、頭を抑えながら僕を睨みつけた。

「あの時は石をぶつけてごめんね。まさか命中するとは思わなくて痛かったよね、怪我はしなかった？」

他人事のようなセリフを吐く自分に呆れた。少女は野良犬のように僕を威嚇しながら、じりじりと後退している。僕との距離を広げながらも、少女は逃げようとはしなかった。

「お腹が空いてるんでしょ？　じゃあ、これあげるよ。君にあげようと思って買っておいんだ」

そう言って、鞆の中からさつきコンビニで買っておいいたパンを掲げて見せた。少女は目をさつきよりも更に大きく、今にも目玉が落ちてしまいそうな程に開いた。僕の口元はピクピクと痙攣しつつ、にやにやと嫌らしく笑っていた。

少女がぐくりと唾を飲み込むのが分かった。それがスタートの合図を知らせるピストルのように、彼女は僕の持つパンに向かって飛びかかるように駆け、強引に取り上げた。そして、物凄い勢いでビニールを破き、パンを口に押し込みだし、あっという間にパンはなくなってしまった。少女は自身の掌についたパン屑まで丁寧に舐めとった。食べ終えた少女は、上を見上げながら脱力の吐息を漏らした。そして、ガチガチと歯を鳴らしながら、バサバサと雨が降るように泣き出した。そのせいで、鼻血と鼻水が混じりあい、口の中に流れこんでいく。それでも少女は思う存分泣き続けた。顔の皮膚がふやけてただれてしまいそうな程、泣いた。

「おいしい？」

「……………おいしっ……」

顔を両手で覆いながら吐くように言った。何だかとても晴れ晴れしい気分になった。

「ねえ、交換条件みたいでなんだけど、君の腕を僕に見せてくれな
いかな？」

少女は何も言わずに、躊躇することなく袖をまくりあげた。露になった腕から、ドロドロと真赤な血液が手首を伝い、掌を伝い、地面へと流れ落ちていた。ごくりと自身の喉がなるのがはっきりと聴こえた。

「すげえ……」

ぽつりと唇の隙間から言葉が漏れた。

少女の腫れた目はもう警戒心を無くしていた。

「そんなに血を見るのが珍しいの？」

どことなく僕を見下したように発せられたセリフに、

「こんなに汚れた血を見たのは初めてだから驚いているんだよ」

と、皮肉ってみた。少女は口角を吊り上げて、短く笑った。本当はこの少女の血が凄く凄く綺麗に見えたけれど、それをあえて彼女に伝える必要はないだろう。

「君がどうして血を流しているのかとか、ゴミを食べているのかと

か、そういう素性は訊かないことにするよ。だけど、名前だけは教えてもらってもいい？」

「……哀子。哀しい子って書いて、哀子」

少女は少し考えてからそう言い、黄ばんだ歯をむき出しにして笑んだ。そして、哀子は僕の名前を尋ねた。僕は自分の名前を名乗り、漢字も教えてあげた。手の甲で鼻血と鼻水を拭いながら、哀子は目を輝かせ、

「素敵な名前ね。あなたの親、いいセンスしているわ」

と、言った。手の甲についた血が街灯に照らされて、鮮やかに輝く。

「君の親もいいセンスをしているね。自分の子どもに“哀しい子”なんて当て字をしちゃうなんて」

僕がそう言い返すと、哀子は複雑そうに表情を歪めた。

「ほんと、殴りたくなるよね。あいこ、だなんて」

そう言いながら、頭を掻きまわった。フケと埃が一気に舞い上がった。

「君は、宇宙人じゃないんだね」

哀子は、笑窪を作りながら笑い、照れ臭そうに「分からない」と言った。

第1章 ゴミを漁る宇宙人（後書き）

貴重なお時間を割いて、お読みくださりありがとうございます。

このお話はプロログ、エピログを含めて12・13回分で終わる予定です。

毎日更新しますので、お時間のあるときにも覗いてやってください。

2007. 10. 12. 子々

第2章 名前のない公園

名前すらない小さな公園がある。僕が幼稚園生のときはよくその公園で遊んでいたが、今では人ひとりとしていなかった。近くにあるもう一つの公園に子どもたちは流れ込んでいた。

その公園にはL字型の土管があり、砂場の上に置いてあった。横穴から入ると一メートルほど先に、砂が敷き詰められた円状の空間がある。その真上にもう一つの穴がある。昔はそこに赤い塗装を施されたハシゴが空へと伸びていたが、ハシゴから落ちて怪我をした子がいたらしく、撤去されてしまった。

哀子とはその公園で何度も会った。哀子は決まってその土管の中にぐったりと横たわっている。僕は学校からの帰り道にその公園に寄り、哀子の様子を覗いて、給食の残りを置いてから帰った。哀子と言葉を交わす日は滅多になかった。僕は親睦を深めて仲良しになることに執着がある方ではないし、哀子はみる限り人付き合いが得意ではないだろう。僕が声をかけるのは決まって哀子が血溜まりの中で寝転がっているときぐらいだった。でも、決して心配して声をかけているわけではない。死なれたら困るからというわけでもない。自分でもそれがどういった感情からなのかはよく理解できないけれど、多分、稀な性質なのだと思う。それでも、僕が「大丈夫？」と声をかけているのは、偽善者ぶりたいたからなのかもしれない。決まって哀子は、そんな僕の内心を察しているのか、返事はしない。

その日もいつも通り、給食の残りを持って公園に寄った。雨がばさばさ降る日だった。パンを土管の中に置いて、立ち去ろうとしたとき、哀子に呼び止められた。僕は所々欠けた土管の中に入り、なに？ と尋ねた。

「この公園、取り壊されるらしいの」

そう言う哀子の声は冷静だった。

「ああ、その張り紙のこと？　僕も見ただよ。残念だね。哀子のお気に入り場所だったのに」

張り紙によると、この公園は二カ月後に解体作業が行われるそうだ。それでも誰も名残惜しそうに遊びには来ない。

哀子は寝転んだまま、荒れた唇をひたすら弄くっていた。僕は膝を抱えた体勢のまま、外の風景を眺めた。雨は勢いを増して、降り続けている。

「この場所が壊されたら、私どうすればいいのかなあ……」

「家があるじゃん」

「家って落ち着かないでしょう」

「まあ、落ち着きはしないね」

哀子はビニール袋の結び目を解き、中からパンを取り出して、口にくわえた。それでも、哀子は寝転んだままだった。

「学校は？」

「途中から行ってない」

「友だちや先生、心配してるだろうね」

僕がそう言うと、哀子はパンを食べるのを止めて、器用に体を捻って僕を一瞥した。そして、体をゆっくりと起こして、またパンを

食べ始めた。

「生徒はみんな私を消しゴムのカスを見るような目で見るし、先生は汚物を触るような顔をするから、大丈夫だと思う。親だって、私みたいに汚いとみっともないから行かなくて言いよって言ってくれているし、私は出来る限り人の前に現われちゃいけないの」

それはセリフとは似つかない、今にも笑い出しそうな声色だった。

「典型的な不幸の形が君のところに集まっているんだね」

そう言うのと、哀子はついに声を上げて、短く笑った。すると、哀子の荒れた唇の皮が破け、ぷちりと血が溢れた。

「そう。……そうかもしれない」

そこで会話は途絶え、沈黙になった。

雨は止みそうにない。哀子の家庭事情にそれほど興味はないけれど、きつと物凄く過酷で、僕の両親よりも酷い親がいるのだろう。そう考えると、あの日傷つけた人差し指がとても空っぽの無意味なものに思えた。僕があの日、本当に小さな傷ではあるけれど、人差し指を自分で切った。僕がそうならば、哀子は首でも切らないといけない気がする。

そう、だからこそ、首を切ってしまわないために、その重荷を捨てることが出来ればいい。

「ねえ、提案なんだけどさ、ちょっとした遊びをしない？　きつとすつごくスッキリして楽しいと思うんだけど」

「遊び……？」

哀子は少し表情を曇らせて言った。

「遊びながら、復讐するんだ。君が不幸をそんなに背負うはめになったのを、全て他人のせいにするんだよ」

「どうやって……？」

僕は近くにあった石をとり、ガリガリと土管の壁に削り書いた。

「本当に？」

「本当に。“無差別連続通り魔事件”って新聞やニュースで報道されると、立派な復讐遊びになると思うんだ。もちろん、怯えるのはこの近辺の人たちだけだと思うけど、それに便乗して各地で起こったら……」

哀子は目を大きく見開いて、僕を凝視した。

「標的は大人だけで。どう？ やってみない？ どうせ、失うものなんてないだろ？」

哀子は頭を掻き耑り、眉根に縦皺を寄せた。フケが舞う。前から思っていたけど、哀子の髪の毛はフケはもちろんのこと、砂や埃、脂がべっとりと付着している。よく頭皮を掻いているし、痒いのだろう。

僕はポケットからガムを引っ張り出し、哀子に与えた。哀子はそれを珍しそうに眺め、口に含んで嬉しそうに笑顔を作った。食べ物への力は凄い。特に哀子に関しては、更にその力は増すようだ。哀子は、僕の意見に賛同した。

僕の考えた復讐遊びは「通り魔」からなる。大人だけを狙い、後ろから近寄り、忍ばせていたナイフで切りつけて颯爽と逃げるのだ。もちろん、相手が死なない程度に。より多くの大人に復讐をするのなら、殺していいは無理だ。だから、軽く傷つける程度でいい。

「でも、一つだけ言っておくけど。私はあなたとは違って、失いたくないものがある。どうせあなたは自分が死んでしまってもいいと思うているんだろうけど、私はそんな馬鹿なこととは思っていないから」

淡々と冷静な口調で哀子は言った。

口が開かれる度に、ブルーベリーの甘酸っぱい匂いが漂ってきた。ガムを噛む音が土管に反響し、空气中を振動する。僕もポケットからブルーベリー味のガムを取り出し、丁寧に折り曲げてから口の中に入れた。口の中一杯にブルーベリーの味が広がり、しばらく僕と哀子のガムを噛む音色だけが存在していた。僕たちはぼんやりとひたすらガムを噛み続け、数分が経ったとき、哀子が口を開いた。

「今の私はまだ死んじゃ駄目なの。今はまだ、私が死んで哀しんでくれる人がいないから……」

第一声は、上手く音になっていなかった。

「僕が哀しんであげるよ」

「……冗談言わないで」

僕の空虚な言葉を、哀子は空虚な笑顔で簡単に返した。

僕は自分がいつ死んでしまっても構わないと思っているけれど、僕が死んで哀しむ人間は少なくとも一人はいるだろうと思う。それが友だちか、先生か、両親かは分からないが。それでも僕は死んでもいいと思っていて、哀しむ人間がいない哀子は死ぬのを拒んでいる。生きる意味が哀子にはあるのだ。

僕は少し、哀子が羨ましく感じた。

羨ましが、嫉妬心や羞恥心に変わり、ぼくの身体中をグルグルと廻る。すぐく気分が悪かった。僕は無性に哀子を殴りたくなった。思わず片手を挙げ、哀子の頭上に構えていた。よく分からない衝動だった。

哀子は目を真丸く見開き、眉間に皺を寄せた。短い悲鳴を上げ、僕から逃げるように距離をとる。ぽかりと空いたもう一つの出口のある空間へ行くと、哀子は一気に雨に撃たれた。それも気にならないほど、哀子は僕の存在を怯え、まるで、殺人鬼を目の前にしているように真っ青になっていた。そして、哀子は頭を抱え、出来る限り身を縮め、ひたすら僕に悲鳴のような声を上げて謝り続けた。僕は掲げた手を下げた。

「う、ごめん……」

僕は手を下ろし、自身の腹に押し付け、条件反射のように謝ったが、哀子は両手で顔を覆い、赤ん坊のように泣いていた。呻き声とすすり泣く声が混じり、手と手の間から覗く唇からガムが転がり落ち、砂の中に吞まれる。哀子の服が泥に汚れ、雨に濡れ、泣き声と雨音に包まれて、別世界のように感じさせた。

土管から外を見ると、古く錆付いた時計台は、八時五分前を指し

ていた。雨は十分後に止んだ。哀子も、抜け殻のようにぼんやりと土管から空を見上げていた。雨雲の去った後の空に月が照っていた。

第2章 名前のない公園（後書き）

お時間を割いて、お読みくださりありがとうございます！

よければ次回もお願いします。

2007. 10. 13. 子々

第3章 復讐開始（前書き）

流血がありますので、苦手なお方はご注意ください。

第3章 復讐開始

次の日の夜中に、僕と哀子は土管の中で落ち合った。

土管の中に置いておいたパーカーとニット帽を哀子はすでに身に着けていた。土管の隅に放置された哀子の制服からは異様な臭いが漂っていた。僕はニット帽を出来るだけ深く被るように言い、サングラスと口元まで隠れるネックウォーマーを渡した。哀子は暑苦しそうに顔を歪めたが、僕は見ないふりをした。

「走りには自信ある？」

哀子に訊くと、

「もう何年も走っていないから」

と返事が返ってきた。

「うん、そうだとは思った。僕も走りにはそれほど自信のある方じゃないんだ。だから、これを使おうかと思って。あ、でも哀子はこれ履いたことある？」

僕は紙袋の中から紺色のローラーブレードを引っ張り出した。頷いてくれることを期待しつつ、僕は哀子にローラーブレードを渡した。

「うん、あるよ。小学生のころに」

「そう、よかった」

哀子はパチンパチンと手際よくベルトを止め、小さな公園をグルグルと何週か回って遊んでいた。そのときの哀子の表情は嬉しそうだった。

僕も久しぶりに履くローラーブレードの感覚を思い出しながら、小型ナイフの調子確かめた。月明かりを受けて光沢を放つナイフは、宝石なんかよりも数倍綺麗だと思った。

公園から出て、僕たちは住宅と住宅に挟まれた、車一台分が通れるほどの道へ行った。ローラーブレードの音が出来ただけ響かないように、僕たちは慎重に夜道を進んだ。

しばらく行くと、前方にサラリーマンがおぼつかない足取りで、歩いているのを見つけた。僕はローラーブレードを止めて、

「あの人にしよう。酔っ払っているみたいだし、最初はああいう人の方がいい」

「……どっちがやるの？」

「僕がやる」

哀子は何度か頷いた。僕と哀子の周りを漂う空気だけがピアノ線を張ったように張りつめていた。

僕はローラーブレードを走らせた。アスファルトを擦るローラーの音が颯爽と響き渡る。僕が男との距離を縮め、残り数メートルとなったとき、男は後ろを振り返った。でも、もう遅い。

僕はナイフを低い位置で構え、膝を少し折り曲げた。男は状況が把握出来ていないらしく、間拔けな声を上げている。僕は構わず、

ナイフを男の太もの上をスツと滑らせた。男は呻き声を上げながら、切られた太ももを必死に押さえ、血が溢れないように必死だった。

僕は加速したローラーブレードを方向転換させ、急ブレーキをかける。ナイフを握る手が汗ばみ、今にも手から滑り落ちてしまいそうだった。男はその場に転がり、ひたすら声を上げて叫び散らしていた。なんて無様な姿なんだろうか。僕は血の付いたナイフを見て、少し気分が悪くなった。なんて汚い血なんだろうと思った。男は僕を憎くて堪らないといった目で見ながら、豚のようにフウフウ言っていた。やっぱり気分が悪い。僕の額に汗が滲んだ。

後ろから流れ込む、ローラーブレードの音に気付かないほど、僕の脳裏は全ての機能を停止させ、手に持つナイフにだけ神経を集中させていた。

骨を何か固い物で殴ったような鈍い音で僕は我に返った。先ほどまで痛みで暴れまわっていた男は静かになった。どうやら、気絶してしまったようだ。

「大丈夫？ 固まっちゃって」

哀子は右手に傘を持っていた。

「それ……」

僕が呟くと、哀子はフフツと笑い声を上げ、

「昨日忘れて帰ったでしょ」

と、笑いの含んだ口調ではっきりとそう言った後、僕の手からナイフを取り上げ、月光に当て、じつくりと観察した。そして、変な方向に折れ曲がった傘を男の上に放り捨てた。

一通り観察し終わると、哀子はナイフを僕に返した。動揺から僕の手はぶるぶる震えている。哀子はそのことには触れなかったが、異常なほど僕の指先から腕までが左右へ、まさに今地面が揺れている最中のように、落ち着かなかった。

僕がナイフをポケットに入れたのを見計らい、哀子は僕の手首を掴み、ローラーブレードを加速した。僕は体勢を崩したが、何とか立て直し、哀子に引っ張られながら、スピードを上げる。

哀子の小さな背中と徐々に小さくなる男を交互に見た後、何故だか叫びたい衝動に駆られた。僕の心臓はバクバクと跳ね上がり続け、餓えた狼のように早く獲物を食い殺したいと騒いでいるようだった。それと同時に、仲間から見捨てられ嘆く、哀調の帯びた遠吠えのようでもあった。

次の日、昨日のことが出ていないか確かめるため、僕は新聞とニュースをチェックした。ニュースでは報道されていなかったが、新聞の隅には小さく載っていた。こんな小さくては意味がないのだ。全ての大人に恐怖を与えなくては復讐とはいえない。

僕は学校の授業中、どうすれば大人たちがもっと騒ぎ立てるか考えた。

僕は学校帰りに土管へ立ち寄り、哀子と相談した。すると哀子は苦い顔をして、顎に手を添えて考える真似事をした。そしてしばらく何かを思考した後、ギョロリと鯉のような目を僕に向けて、

「まだ一度目だから仕方ないわ。あと何回かすれば、きっと大人たちもつと騒ぎ立てるようになる」

にっこりと笑んで言う哀子に、僕はガムを与えた。

きっと哀子の言う通りだ、と僕は思った。神様が僕の補助をしてくれているのだ。そう、だから哀子がいる。それが何よりの証拠だ。

「今日はよしとおこう。明後日の午後十時にまたここで」

哀子は相槌を打ち、ガムを土管のコンクリートに貼り付けた。

「そういえば、哀子の両親には哀子が深夜に家を出て行くこと知られていないよね？」

僕が訊くと、哀子はガムを貼り付ける手を止めた。先程のぎょろりとした眼は一気に虚ろになり、ぼんやりと紫色のガムを見つめている。

「さあ、微妙なところね」

ポツリと出た呟きと共にガムがぽとりと落ちた。

僕は、気付いていないといいね、と他人事のような、自分さえもゾッとするような声色で呟き、嘲けりに似た短い笑いが漏れた。

三日後、僕らの復讐は「少年リップパー」という名をうけて、ニュースで報じられた。

第3章 復讐開始（後書き）

お時間を割いて、お読みくださりありがとうございます！
次回もよければ宜しくお願いします。

2007. 10. 14. 子々

第4章 それぞれの現場（前書き）

流血がありますので苦手な方はご注意ください。

第4章 それぞれの現場

「連続無差別通り魔が近辺で相次いで出没しております。夜道を歩く際は十分ご注意ください」と書かれた看板や貼り紙を街中でよく見掛けるようになった。学校でも街中でも通り魔事件の話ばかりが飛び交っている。

「無差別に人を切りつける通り魔が出没しているらしいから、夜道は一人で歩いちゃ駄目よ」

近所のおばさんにそう言われ、僕は愛想よく、

「はい、気をつけます。おばさんも気をつけてください」
と言った。きつとその時の僕の笑顔は最高に輝いていただろう。

大人たちは得体が知れない通り魔に怯えている。いつ自分が被害にあうか分からない状況のなかで、仕事を休むことも出来ずにもがき足掻く姿を僕は恍惚と眺めている。「無差別」だから僕にだって次の被害者が誰なのか分からない。次の被害者は僕を心配し、注意をしてくれたこの主婦かもしれないのだ。

犯人の正体を知った時、僕の周りの人々はどう思い、環境はどう変わるのだろうと、真っ暗な押入れの中で僕は考えた。最後の結末は僕が勝つのか、大人が勝つのか、それは誰にも分からないからこそ、止めることが出来ない。いつしか「復讐」の中に「快樂」が生まれ始めているようだ。それは、人を一人切る度に成長していく。その「快樂」の赤ん坊が、堪らなく愛しい。

次の日の夜、僕と哀子はまたナイフを持って、静まりかえった住宅街へ向かった。ターゲットは男でも女でもどちらでも良かった。でも、捕まってしまうては僕たちの復讐劇が終わってしまうため、

極力酔った人か、疲れている人を選んだ。僕はあまり女の方は切りたくなかったが、哀子が女の方が切りやすいと思う、と発言し、特に拒否する理由もなく、そうだね、と肯定してしまった。

だから、今僕たちが狙いを定めているのは「女性」だった。コツコツとヒールの音を響かせて、少し早足に歩く女性は、辺りをキョロキョロと挙動不審に見渡していた。どうやら「少年リッパー」の存在を恐れているらしかった。怖がっている。僕らの存在を恐れている。それが分かると、身体中がうずいた。怖がっている人間ほど、ターゲットにしたくなる。まさに犯罪者の性癖がもう僕の中にあるようだった。許しを請う人質を、笑いながら撃ち殺してしまう犯罪者と似ている。そう思うと、背筋がゾクツとした。

僕と哀子はナイフを構えた。わざとローラーの音を大袈裟に響かせて、僕は女のところまで滑った。その音に気付いた女は驚いて振り返り、僕たちの姿を見つけると、走り出した。凄く走りにくそうに駆けた。そんな靴で、そんなスカートで逃げきれぬつもりなのだろうか。僕は少し、スピードを落とした。女は大声で叫んだ。何度も、誰かー！ と叫び、助けて、と息を切らしながら何度も呟いていた。

僕は追いかけるのを止めた。女が逃げ惑う様子がおもしろくて、出来るだけ見ていたくてスピードを落とし続けていたら、いつしか止まってしまった。僕の後ろから滑ってきた哀子は、怪訝な声色で、どうしたの？ と呟いた。僕は何だか虚しい気分になった。

「草太がやらないのなら、私がやるけど？」

哀子はそう言って、ナイフを光らせた。僕は哀子の手を掴み、ナイフを下ろさせた。哀子がサングラス越しに僕を睨んでいるのが分かった。

もう女の姿は数十メートル先にあった。だけど、僕なら追いつける自信があった。哀子は何も言わずに、ナイフをポケットにしまい、僕の背中を叩いた。早くしないと、誰かが出てくるかもしれない。僕はナイフの柄をしっかりと握りしめて、ローラーを滑らせた。あんな走り方じゃあ、僕に追いつかれるのは時間の問題だ。女のヒールの音が段々近づいてくる。女は僕の姿を見ると、また大声で叫んだ。僕はナイフを構えた。

あと少しで二の腕を切る、という時に、僕の視界は一瞬奪われた。女は持っていた、携帯電話のライトを僕に向かって当ててきたのだ。一瞬間僕は怯んだ。サングラスのお陰で転倒まではいかなかったが、僕の手元が狂ってしまった。切ろうと構えられた手はそのまま止まることなく女目掛けて向かっていき、肉の切れる感触がナイフから掌に伝わり、身体中を駆け巡った。女の痛々しい叫び声が、僕の鼓膜を振動させる。女は脇腹を抑えて、地面に転がり、泣き続けた。僕は女の携帯電話を取り、一一九を押し、救急車を呼んであげた。女は僕を鋭い目付きでずっと睨み続けていた。僕は携帯電話をバキッと折り、女の上に放った。そのまま、哀子の元へ引き返し、

「帰ろう。今日は少し、血を見すぎた」

呟いて、僕たちは公園で血を洗い流し、家に帰った。

僕は死んだっていい。親も知らない。友達も欲しくない。金も、愛も、何も何も、消えて、僕を見放しても構わない。だけど犯罪を行う意味だけは、消えられたら困る。ヘビースモーカーにとっての

煙草や、アルコール中毒者にとっての酒や、麻薬中毒者にとっての薬のように、僕には人の傷が必要なのだ。人の傷がないと、僕は「自分を傷つけて生きる人間」に戻ってしまう。それがとても恐ろしかった。

「きっとあなたは産まれた時からこういう道を行くことが決まっていたのね」

「産まれた時代と産まれた環境がいけなかったただけだよ。今はもう明るい未来が待っている、とか簡単には思えない時代だし。幼い頃は“希望”のない世界なんて有り得ないと思っていたけど、今じゃあ“希望”の意味すら分からなくなった……。だから、僕は大人の希望を奪うんだ」

哀子は哀れんだような瞳で僕をレンズに映した後、膝小僧に目を押し当てた。そして小さく、素敵ね、と呟いた。哀子の二の腕には赤黒い痕ができていた。首にも点々と、痕が虫の群れのように無数に存在していた。避けて避けて、避け続けた疑問を僕はうっかりと尋ねてしまった。

「これ、どうしたの？」

哀子は膝小僧から目を離し、僕に一瞥くれてから、自身の腕を指でなぞった。表情が一気に強張った。しばらくの沈黙。僕の唇はぶるぶると震え、その空気の悪さに息を吐くことすら難しく感じた。しばらくすると、哀子の目からボタボタと涙が零れだし、鼻水もダラダラ流れだし、すごく惨めな表情になった。それを見た僕は何故か震えがおさまり、自分でもゾツとするほど穏やかな心身で哀子のダラしない泣き顔を見ていた。

「もういいよ。答えなくていい」

泣きながら哀子は土管から抜け出して、砂場で嘔吐した。そして

その場に蹲ってしまったため、僕は哀子を背負って家まで送っていくことになった。

哀子の家はアパートだった。何十年もそこに立ち尽くしているのか、ボロボロで陰気だった。哀子の汚れた身なりと、とても似ている。

哀子を背中から下ろし、彼女の背中をポンと押してあげた。哀子は僕を赤く腫れ上がった目で一瞥してから、階段をゆっくりゆっくりと上がっていった。哀子が家へ入るのを見送り、踵を返した。後ろから何かが暴れるような音と叫び声が聞こえた。僕は哀子の家のドアを一瞥し、その場から走り去った。自分の無力さに嫌気がした。

第4章 それぞれの現場（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

何かありましたらよければコメントお願いします！

2007. 10. 15. 子々

第5章 事情聴取

「おい、ニュース見たかよ。少年リッパーのやつ！」

翌朝、学校へ行くと友達の洋平が興奮した口調で言った。僕は、机に鞆を置き、適当に相槌を打ちながら、椅子に座って頬杖をついた。洋平は僕の前の椅子に座り、鼻の穴を膨らませながら、少年リッパーの事件について淡々と語り始めた。どこから流れたのか、的外れな噂まで混ぜられていた。

「それで？ その少年リッパーってまだ捕まってないの？」

「まだ捕まってないみたいだぜ。どうやら犯人の特徴は分かっているみたいなんだけどな」

「へえ……。どんな人？ もしかして、僕たちみたいな少年とか？」

笑い混じりに言うところ、洋平は驚いて目を見開いた。

「正解。よく分かったなあ。そうなんだよ、どうやら俺たちと同じぐらいの子どもらしいぜ。しかも二人組で全身黒尽くし。大人しか狙わないらしい」

洋平は自分のことのように自慢げにそう言うと、握り拳をつくり、また輝く眼差しで熱く語り始めた。僕はそれがおもしろくて、楽しくて、ついつい笑ってしまった。そうすると、洋平も一緒になって笑った。目の前にいる友達が、その犯人なのだと思ったら洋平はどんな表情をするだろうか。洋平は笑って流してくれるだろうか。

「なんかさ、先生たちが夜中に見回りしてるらしいんだけど、逆に返り討ちに合ったって話だぜ」

ぶはっ、と一気に息を吐き出して、腹を抱えて洋平は笑った。

そのことなら僕もよく覚えている。学年主任の平山先生と、体育教師の大西先生が二人で見回っていたとき、偶然彼らの姿を見つけた僕と哀子は、二人をターゲットに決めた。いつも威厳がましくしている平山先生は正直簡単に切れた。学校では態度がデカくても所詮ただのおじさんだし、痩せて今にも倒れてしまいそうだった。ローラーで背中を思い切り蹴ると、風船のように前に飛んで行き、派手に扱けた。今日知ったことだが、どうやらそのときにあばらを骨折したらしい。問題は平山先生の方だった。体育教師だけあって、体格はいい上、体力もある。平山先生が全方に飛んでいったのを呆気にとられて見ていた大西先生は、戸惑ったように僕たちと平山先生を交互に何度も見ていた。その表情にはいつもの厳しい彼の面影は微塵もなかった。木刀を持っていることに気付いた大西先生は慌てて、木刀を僕らに向かって構えた。だけど腰は退けていた。所詮、こんなものなのか。僕は少しばかりガツカリした。これでは、生徒が危機に瀕していても助けてはくれないのではないかと思った。思わず吐息が出て、一向に向かってこない先生を哀子が背後から切った。やはり、ぎゃあぎゃあ喚き散らし、豚みたいにふうふう息を荒げて、僕らに向かって必死に謝り続けた。僕は、倒れたまま呻く平山先生の腕を軽く切った後、その場を去ったが、昨日の今日で知っている奴がいるのか。子どもの間の口コミは凄いな。

僕は昨日のことを思い出して、洋平同様、ぶはっ、と吹き出し腹を抱えて笑った。教室中が騒がしいため、僕らの笑い声はそんなに響くことはなかった。

「それにしても、本当にカッコいいよなあ、少年リッパー。俺たちみたいな凡人にはあんなこと無理だしな。子どもたちの大人に対する恨みを晴らしてくれているみたいでスッキリするんだよなあ……」
「そうだね。きっと復讐してくれているんだよ。僕たち凡人のためにさ」

洋平は白い歯をむき出して、「だよな！ 少年リッパ―は俺ら子どもの正義の味方だ」と嬉しそうに言った。僕は何だかとても誇らしい気持ちになった。その後、洋平は色んなクラスメートに「少年リッパ―」のことを力説してみせ、正義の通り魔の信者を増やしていった。この様子を哀子にも見せてあげたかった。僕たちを神様のように、正義と信じている、この凡人たちの様を、見せてあげたい。自分たちじゃあ何も出来ない、この凡人たちの様を。

LHRの時間に僕たちは通り魔事件のことを話し合った。

「平山先生と大西先生のために、折鶴を折りましょう。みんなの意見が無記名でいいので、この紙に書いてください」

どうやら警察の調査がこの付近の学校で行われているらしい。紙に自分の意見を書いている最中、一人ずつ別教室へ呼ばれていた。それにはしゃぐ生徒たちは、自分の意見なんて書いている場合じゃないと、友達と興奮しながら「少年リッパ―」の話をしていた。

僕はシャー芯をコツコツと机に当てながら、ぼんやりと外の風景を眺めていた。大人と子どもでこうも反応が違うことに驚いた。子どもは大人がどうなろうと興味はなくて、心配するどころか「悪人」の方を「正義」にしてしまった。これなら、連鎖反応が起こるのも時間の問題だろう。僕は紙にシャーペンを走らせた。

“ 立ち上がろうぜ。少年たちよ ”

僕はその紙で紙ヒコーキを折り、窓から外へ投げた。紙ヒコーキは風に乗る、思ったより遠くまで飛んで行った。

しばらくして僕の名前を呼ばれ、先生に連れられて別教室へ移動

した。その間先生は、

「ただ話を聞いただけだから、何も怖がることはないからね。警察の人に尋ねられたことは、出来るだけ答えてね」

と優しい口調で言い、僕の肩を二度叩いた。先生の手が軽く震えているのが分かった。

「大丈夫だよ、先生。僕、事情聴取って一度は受けてみたいと思っていたんだ。テレビでしか観たことないから、凄くワクワクする」

そう言うと、先生は安心したように笑みを浮かべ、何も言わずに僕から視線を外した。

教室の中に入ると、ひげの生えたおじさんと、若い男の人がパイプ椅子に座り、紙束をばらばらと捲っていた。僕の姿を見るや否や、「やあ、こんにちは。いきなりでビックリしていると思うけど、とりあえずこっちに座って」

と、長机を二つ挟んで向かい合わせに置いてあるパイプ椅子を指さした。パイプ椅子に座るとギシギシと軋んだ。

「ええと、さっそくで悪いんだけど、君は最近この辺りで起こっている通り魔事件のことを知っているかい？」

「はい、知っています」

「じゃあ、その事件についてどう思う？」

僕はしばらく思考する振りをした後、

「酷いことをするなあ、と思います」

と答えた。おじさんはひげを撫でながら、一つ溜息を吐いた。僕の言ったことを若い男がメモしている。

「じゃあ、この事件のことで何か知っていることはないかね。例えば、誰かがナイフを持っているのを見たとか、この子が“少年リッパ”しか知らないようなことを話していたとか……」

「……特にそういうのはありません」

僕が言うと、おじさんは先ほどよりも深い溜息を吐いて、そうかい、ありがとう、と言い、僕を退出させた。

教室の外では先生と、次に面接をされる洋平が立っていた。洋平は僕に目で合図を送り、僕は笑みを浮かべてピースサインを送った。先生に背中を押され、洋平はおじさんたちの待ち構える教室の中へと入っていった。ボタンと扉が閉まるのを見送り、僕は先生を一瞥した。先生は僕を見下ろしている。それも、今まで見せたことのないような不審がるような瞳だった。

僕は特にそのことには触れずに、教室へ戻ろうと踵を返したとき、先生に肩を掴まれた。僕が先生の顔を見上げると、先生は眉根に縦皺を寄せて、寂しそうな表情で、僕をジッと見下ろしていた。肩に乗せられた手がギシギシと力を増していく。肩の肉に爪が食い込むような痛みに耐え切れず、僕は先生の手を振り払った。

「いきなり何ですか？」

「何を聞かれたのかな、と思って。ごめんね、力を込めすぎちゃったみたいね。先生、結構握力あるのよ」

そう言って、何事もなかったかのように先生はおどけたように笑った。僕は肩を抑えながら、聞かれた内容を話した。

「……今はまだ大人しか被害にあっていないけれど、いつ子どもが襲われるか分からないから、草太君も気を付けてね」

「先生の方こそ気を付けて」

僕が教室へ戻ろうと向きを変えると、また先生に呼び止められた。「人を傷付けるということは、自分自身のことも傷付けるということなのよ、って、ずっと前に言ったこと覚えてるかしら」

首を横に振ると、先生はまた寂しそうな表情を作り、

「そう、でも、覚えておいてほしいな、この言葉。そして、いつかこの意味を草太君にも分かってもらいたい」

僕は返事をしないまま、教室へと向かった。

第6章 役立たず

その夜、僕は一人で復讐遊びに狩り出した。

哀子がその日、土管の中にはいなかったからだ。僕は少しばかり心配になったが、僕が気にすることじゃないだろう、と思い、パチンパチンとローラーブレードのベルトを止めた。

ポケットの中に手を突っ込んで、ナイフがあることを確認し、よし、とまるで試合前の選手のように小さく気合を入れる。サングラスとネックウォーマーをつけ、帽子を被り、僕は慣れた足取りでローラーブレードを滑らせた。今日の風は冷たく、じめじめしている。空は雨雲で覆われている。

しばらくターゲットを探してウロウロしていると、雨が降り始めた。そういえば、今朝のニュースで夜に雨が降ると言っていた。雨は激しさを増すばかりで一向に止む気配を見せない。今日は止めておこうかと思ったとき、前方でゆらゆらと揺れる傘を見つけた。僕は引き返しかけた足を止めて、傘の方へ走りだした。

ナイフが掌から滑り落ちないように力の限りに握りしめ、傘を差す人にだけ視点を合わせて、まるで遊び相手を見つけた幼児のように、僕はまっしぐらに走った。どうやら男の人のようだ。雨音に掻き消されてローラーブレードの音が男の人には聴こえていないらしく、僕の忍び寄る気配に全く気付いた素振りを見せない。僕の口に不適な笑みが浮かんだ。

ナイフを構えた。男の太股が切れるように少し前傾姿勢になり、狙いを定める。既に何度も経験している僕にとってはもう手馴れたものだ。

ラケットを振るように思い切り振り切ると、肉が切れる感触がした。男の一瞬の悲鳴。僕は急ブレーキをかけて、男を蔑んで、痛がる姿を見て、立ち去ろうとした。

すると、足元に異様な重さを感じ、滑り出そうとした足が進まず、濡れたアスファルトが滑り、僕はその場で派手に転倒してしまった。足元を見ると、男が僕の足首を掴んでいた。僕は舌打ちをし、男を振り払うべく、足を上下に振った。しかし、男は僕の足首を離さない。ローラーブレードを脱ごうと手を伸ばしたが、男は僕の足を伝い、太股に体全体でしがみ付いてきた。僕はとにかく抜け出すことに必死だった。男は僕を見てにやりと笑みを浮かべると、口を大きく開いて「誰かー！」と大声で叫んだ。僕は体中の毛が瞬時に逆立ち、ゾクゾクと背筋を震えさせた。家中の電気が徐々に点き始め、僕は舌打ちをした。もうろうとする頭を必死に回転させて逃げる方法を考えるが、混乱する脳では良い案が全く浮かんでこない。

そのとき、僕はハッとした。手にナイフを持っている。これで男をめった刺しにしてしまえば……。僕は男に一瞥くれ、ナイフをジッと見つめた。もう迷っている場合じゃない。僕はナイフを力いっぱい握りしめ、大きく振り上げた。そのとき、鈍い音が雨音に混じり、僕の耳に流れ込んできた。僕は音のした方を見た。雨で視界が奪われ、何が起こったのかすぐには分からなかった。そして、微かな期待の言葉が漏れた。

「あ、哀……っ……え……」

気絶した男の背後に立っていたのは哀子ではなかった。僕の担任の先生が手に石を持ち立っていた。何で先生がこんなところにいるのか訳が分からなくなり、僕は言葉を失った。先生は僕を見下ろして呟いた。

「逃げなさい。さあ、早く」

「なんで……」

「早く！」

僕は先生から目を反らすことが出来ず、混乱する脳を必死に整理しながら僕は立ち上がった。アスファルトの地面が滑る。今日、学校での先生の表情と言葉がフラッシュバックする。先生は僕が草太だと知っているのか？僕は何度も躓きながら、ローラーブレードを必死にこいでその場から立ち去った。

次の日も、その次の日も、先生はいつも通り、笑って授業をしていた。僕の思い違いだったのかと一安心したが、僕が日直だった日、先生は僕に言った。

「先生、信じてるから」

夕日を浴びて優しく笑みを浮かべる先生は、マリア様のように綺麗に見えた。

「無差別通り魔事件」は僕の計画通り、連鎖反応を起こし、各地で頻繁に出没し始めた。だけど、そう易々といくわけもなく、僕たちの計画をきちんと理解しているのかいないのか、子どもを狙った通り魔や、老人を狙った通り魔が現れた。正直、僕はニュースを見て、ああ、失敗したな、と思った。通り魔を起こした人たちは次々に逮捕されていき、一時の波が起こった後は、一気に通り魔の数も減り、以前までは日夜報道され、討論されていた通り魔事件も、あつという間に聞かなくなった。自殺の連鎖反応同様、数日間だけの出来事だった。僕のように失うものがないと断言できないような人間は、後ろめたさを持っている。だから失敗するんだ、すぐに捕まるんだ。役立たずめ！

第7章 三十七日目

愛しの「A I」へ

僕はもう、十一人の人を切った。僕を止めることが出来るのはこの世には君しかいない。けれど、君は僕がこんなことをしているなんて夢にも思わないだろう。だから、きっと僕はずっとずっと人を切り続ける。

そういえば僕が切った十一人の中に、一人だけ君に似た女性がいる。ニュースで知ったが、名前は「宮部愛子」というらしい。なんて偶然なんだろう。

愛すべき「A I」へ

ああ、何てことだ。

僕はどうすればいい？

教えてくれ、僕の女神様。

「A I」以外の全ての人間へ

僕が怖いか。僕が怖いか。僕が怖いか。僕が怖いか。僕が怖いか。

僕が怖いか。僕が怖いか。僕が怖いか。僕が怖いか。僕が怖いか。

僕が怖いか。僕が怖いか。僕が怖いか。僕が怖いか。僕が怖いか。

僕が怖いか。

僕も自分が怖い。

遊び初めて今日で何日が経ち、何人が犠牲者となったかは定かではないが、ニュースによると第一の犯行が起こった日から、一番新しい犯行が起こった日までは三十七日が経ったそうだ。その期間で被害者の数は二十七人になるという。朝、母がそのニュースを見ながら、煙草をふかして「どうして切るだけで殺さないのかしら」と、独り言をぼやいていた。朝から真っ赤なルーージュにマスカラを塗りとくったケバいい化粧で、派手な赤い服に身を包んだ母は、いつ会っても赤の他人に思える。知らないおばさんが勝手に家に上がりこみ、さぞ自分の家のように振る舞っているようにしか見えない。彼女は僕と似ても似つかないのだ。僕が母をそんな風に見るように、父も僕をそんな風に見る。父に一度だけ「お前はどこの子だい？」と尋ねられたことがある。幼かった僕は父を見つめるだけでどうすることも出来なかった。

父と母は対称的だった。父はエリート、母は落ちこぼれ。難関大学卒の父と中卒の母。二人がどこで出会ったのかはあえて言わないが、彼らはそれなりに愛し合っていたらしい。けれど、今は話すことすらなくなり、顔を合わせることもすごく少なかった。息子の僕に話しかける回数は日を重ねるごとに減っていき、今では必要最低限の会話しかしなくなった。

「お前なんか産まなきゃよかった」とは言われたことはないけれど、他人のような扱いをされるのだからやはり僕はいらないのだろう。親は僕が死んだとき哀しむだろうか。九十九パーセント哀しまないと想定して、残り一パーセントに希望を持つ僕は、可哀想になるほど惨めだ。

部屋の電気を点けずに、僕は月明りだけを部屋の灯として、何人もの大人の血を吸ったナイフを眺めた。ダイヤモンドよりもルビー

よりも綺麗に光沢を放つ。僕を侵食していくナイフと「少年リッパ―」という名の鬼、そして哀子の存在。ふ、と笑みが零れた。

光沢を放つナイフに映った僕の姿は、父に似ていた。

「少年リッパ―」が切りつけた女性が死んだのを知ったのは、三十八人目の被害者が出たときだった。

「そう、死んじゃったの」

哀子はぼんやりと呟いた。

「女の人だね。ずっと危篤状態だったんだって」

「ついに私たちも殺人犯になってしまったのね」

「……ニュースでは三十八人が被害にあったって報道してるけど、少し多すぎると思わない？」

「どういうこと？」

「僕たち、そんなに人を切ったのかってことだよ」

僕が言うと、哀子は嫌そうに顔をしかめた。

「私たち、二人で行動する方が多いけど、最近は別々に行動することもあるんだし、それぐらい被害者がいてもおかしくないわ」

僕から目を反らし、投げやりに言った。哀子の横顔からは、赤黒く変色している頬がよく見えた。痛々しく腫れあがったそれは、あの夜に聴いた音を僕の脳裏に甦らせた。

どうして僕の周りは、僕を含め、人の死に冷酷なのだろうか。そのくせ、自分のことは大事で、そのためなら何を犠牲にしてもいいと思っている。だけど、自分の欲だけで復讐遊びを楽しみ、哀子も巻き込んで、自分の快楽だけに沢山の人を犠牲にして、笑っている僕が、きっと一番冷酷なんだろう。

そんな自分に恐怖を感じたから、というわけではない。僕たちは女が死んだあの日から、復讐遊びをぱったりとしなくなった。それは自らの意思ではなくて、そうするしかなかった。

「少年リッパー」を名乗る殺人事件が起こったのだ。死体はナイフで何度も刺され、道端に放置されていたらしい。ナイフの痕から「少年リッパー」の使用したナイフと同じものと判断され、「ついに殺人に目覚めた悪魔！」と数々のニュースで報道された。もちろん、僕も哀子もそんな意図的に人を殺した記憶はない。そして、大人にむけた挑戦状も、書いた記憶はない。

ニュースが報じるには、こう書かれていたらしい。

全ての大人へ

僕を恨むか

僕が憎いか

ならば、恐れる

ならば、捕まえてみる

僕は全ての大人に復讐する

これは「復讐ごっこ」だ

さあ、遊ぼうじゃないか

死体から流れた血で書かれていた。

そしてそれから、どうすることも出来ずにただ呆然とニュースを見る僕を嘲笑うように、死体の数は増えていった。だけど、何人も人が死んでいく内に、僕はその事件に興味を持たなくなった。「ああ、またか」と思って、いつも通りの日々をぼんやりと過ごすのだ。これで大人が恐れれば何の心配も、問題もない。

数日後、家にかかってきた一本の連絡網で知らされたのは、担任が「少年リッパー」に殺害されたということだった。それにはさすがの僕も焦り、受話器を落としてしまいそうになった。好きだったとかそういうわけではないが、身近な人が僕の作り上げた遊びの犠

犠牲者になったのは、言い様のない複雑な気分僕をさせた。連絡網を回してきたクラスメートの瀬戸さんは泣きながら、震える声で葬式の日程を伝えてくれた。僕はわざと掌で鼻を叩き、涙声に似た声色で、言葉を詰まらせ、次のクラスメートに事情を伝えた。

葬式は、何度も目薬をさして挑んだ。隣のクラスの担任が、僕に優しく声をかけ、言葉を選びながら慰めた。どうやら先生たちは生徒一人々々に声をかけて回っているらしかった。

「先生たちも大変だなあ」

洋平が僕の隣に座りながら呟いた。いつもは制服を着崩している洋平だが、この日ばかりはきちんと着こんでいた。僕は先生の遺影を見ながら、ぼんやりと相槌を打った。

「ま、俺のことは慰めにこなかったけどな」

へらへら笑って言い、すぐに吐息を吐いた。僕たちはざわつく式場の中、数十分間静かに座っていた。しばらくして、洋平が口を開いた。

「知ってるか？ 先生犯人見たらしいぜ。だから殺されたんだってさ」

「……そうなの？」

僕の脳裏に先生の表情が蘇った。事情聴取を受けた後の哀れむような、悲しむような表情で僕を見下ろしていた先生の顔。あのとき、僕に「逃げる」と言った先生の震えた声。マリア様のような笑顔。信じてる、の言葉。

「ああ、どうやらそれ、俺らの学校の生徒だって噂だぜ」

洋平は座布団の結び目を弄りながら、独り言のように呟いた。

僕は先生の笑った写真を見ながら、あるとき先生が僕にしたような表情を送った。可哀想な先生。だけど、沢山の人に哀しんでもらえる先生が何だか凄く羨ましいと思った。

「俺、前に少年リッパーは正義だって言ったじゃん。ってことは、先生は悪だったのかな」

「うん」

「そうか、やっぱ悪だったのか。だったら殺されても仕方ねえな」

「うん」「じゃあ、何でみんな泣いてるんだろう」

「……自然と出てくるんだよ、涙が」

「そういうもん？」

「うん、そういうもんだよ」

「そっか……」

洋平の目から一粒の涙が零れた。僕はポケットからハンカチを取り出し、洋平に渡した。洋平がへへッと笑うと、それが引き金のように、その瞬間に洋平の瞳からバサバサと涙が溢れ出した。洋平はだらしなく眉を八の字に下げて、齒を噛みしめて、目と瞼を真赤にしながら、しばらく鳴咽混じりに泣き続けた。

「先生って悪だったのかなあ？」

僕の呟きに、

「こんなに哀しむ人間がいるんだ。悪じゃねえよ」

情けないほど泣きじゃくった洋平は、涙声で答えた。

第8章 信じてる

その日、家に帰った僕は、ナイフを机の引き出しにしまい、衣類を紙袋に収納し、押し入れの中に置いた。

ゾワゾワと身体中がうずく。犯人を捜しだすことは不可能だろうし、自分の「少年リッパー」としての過ちを悔やみ、神様に許し合う気もない。ならば、どうしてこんなにうずくんだろう。

僕はカーテンを開け、窓からゴミ捨て場を見下ろした。哀子がゴミを漁っていた。そういえば、最近哀子に会いに行っていなかった。哀子は僕が見ていることに気付かず、ひたすらゴミ袋を開けては漁って、時たま顔を突っ込んで奥まで必死に探していた。

なんて惨めなんだろう。復讐遊びを止めた僕たちは、その瞬間縁が途絶えた。僕たちは人の不幸の上で繋がっていたのだ。僕はカーテンを握りしめた。眉間に力がこもり、全身が緊張したように強張る。僕は足を縛れさせながら、引き出しからナイフを取り出し、ジッと見つめた。身体中が汗ばむ。僕はナイフが手元ないと落ち着かないように、なおしても、なおしても、僕はナイフを手元へ戻してしまう。また誰かを切りたくなってしまう。傷が見たくて堪らなくなる。

そういえば担任が「人を傷付けるということは、自分自身のことでも傷付けるということなのです」と泣きながら語ったことを今更思い出した。クラスでいじめがあったときだった。もう彼女は死んでしまったけれど、第三者のくせに泣きながら訴えるなんて、きつと

先生は人が傷付くことが許せない人だったのだろう。僕が、友達に合わせて何となく笑顔を作っていたとき、担任だけ気付いてくれたこともあった。先生の「信じてる」は僕にちゃんと通じているのだろうか。もしも今、先生が生きていたら僕は宣言出来たかもしれない。「もう人を傷付けて生きるのは止すよ。ありがとう、先生」そう言っ、はにかんで笑っていたかもしれない。もう、機会は奪われてしまった。唯一、僕を信じて、僕を泥沼から引っ張り出そうとしれくれた先生は、死んじやった。

人が一人僕の周りから消えただけなのに、何だか気分が重く、鼻の奥がワサビを食べたときのようにツンとした。

「信じてる……」

僕は先生の言葉を思い出して呟いてみた。そうしたら、一気に涙が溢れた。本当にマリア様のような人だったんだと、今更知った。ナイフをソツと引き出しの中へ戻し、再度窓からゴミ捨て場を覗いた。哀子はもういなかった。久しぶりに明日会いに行こうと思った。

土管から膝から先だけが出ていた。覗きこむと哀子が、棺に入る時のように仰向けに寝転がり、手を胸の上で組み合わせていた。

「久しぶり、ちゃんと生きていたみたいで安心したよ」

「……そう。生き残るの大変だったわ」

まるで戦争に行ってきたような言い草だ。哀子は首を縮め、目だけで僕を見た。

「傷が増えてるみたいだけど……」

哀子の足には生傷がいくつも出来ていた。それだけじゃないのよ、と哀子はズルズルと体をスライドさせながら、土管から出てきた。

そして、僕の前に立ち、腕まくりをした。そこにも傷はいくつも浮いていた。哀子の顔にも傷があり、それは痛々しく腫れ上がり変色している。

「昨日、ゴミを漁っていたら近所の人に見つかったの。しょっちゅう荒らされるから待ち伏せしていたらしくって。それでちよつと殴られてしまったの。電話番号教えて帰ったら、家に連絡がいつてて親が……」

「そうか、大変だったね」

僕が少し目を離れた間にそんなことがあったことに驚いたが、こんなありきたりな言葉しか出てこなかった。哀子が相手だと、これぐらい平気だと思ってしまう。それなのに、僕は哀子の顔を直に見ることが出来なかった。

「もう、あのゴミ捨て場にはいけないから違うゴミ捨て場を探さなくちゃ。生きるのって大変ね」

「普通の子どもはもっと楽だと思うけど」

「そうなの？　じゃあ、草太は楽？　生きるの、楽？」

哀子の顔を見たくないのに、哀子は僕の目を見るために顔を捻らせる。そのため、どうしても背けることが出来なかった。まるで、ホラー映画のスプラッターシーンを間近で見ているような気分だ。

「僕は、楽な方だと思う」

首が痛くなるほど俯いてそう言うと、哀子は腰を曲げて、僕の顔を覗きこんだ。そして、そんな風には見えないけど、と呟き苦しそうに笑った。唇がぶるぶる震えて、喉奥が苦しくなって、眉間が痙攣した。昨日、しまいこんだナイフも今は僕のポケットの中にあつて、それを握りしめている自分が可哀想で哀れで、早くこんな僕から逃がしてあげたくて堪らない。

「ねえ、そういえば、殺人事件はまだ続いているの？」

おもむろに土管に戻りながら哀子は言った。僕は哀子の隣に座り、ポケットから切り抜いておいた新聞記事を見せた。「少年リッパ」を名乗る殺人鬼の残したメッセージの内容を見て、哀子は眉をしかめた。そして、記事を隅から隅まで丹念に読み、丁寧に折りたたみ、僕に返した。

「この殺人鬼は子どもなのかしら。大人を恨んでいるんだもの、きつとそうよね」

「分からないよ。大人の中にも大人を恨んでいる人がいるかもしれないし……」

「ううん、きつと子どもよ。きつと、子どもが犯人。それも、私たちと同じ歳ぐらいの」

哀子の目が一瞬光ったように思った。僕は新聞記事をポケットにしまいこみ、その際に指先にナイフが触れた。哀子の言葉には絶対的な自信があるように思えた。いつもよりも強い口調、強い目、どこからそんなものが出てくるのだろう。背中にじわりと汗が滲んだ。「哀子は僕のあげたナイフ、まだ持ってる？」

「もちろん持っているわ。ポケットの中にいつも忍ばせている。これがあると安心するの。おかしいと思わない？ 人を傷付ける凶器なのに、安心するの」

先ほどまでの強いものが何も残っていなかった。ポケットからナイフを取り出し、柄の間に折りたたまれた刃を取り出して、僕に向けてかざした。刃は錆びびついている。僕もポケットからナイフを取り出して、哀子に向けてかざした。ナイフの刃とナイフの刃が反射し合い、光沢を一瞬放った。

「何人もの血を吸ってきたナイフって貴重よね。それが今ここに二

つもあるなんて」

「作ろうと思えば、何本でも作れるさ」

僕はナイフの刃をしまい、ポケットの中へと滑りこませた。哀子は未だにナイフを目前に掲げ、恍惚とした瞳で見つめていた。

「血を吸いすぎたから、血が欲しいって嘆くの。それっておかしい？」

「え……？」

どういう意味？ と訊こうとした時、ひやりと首に冷たさを感じた。その瞬間、僕は石のように固まり、動けなくなった。一気に身体中に汗が滲み出す。僕の首筋にナイフの刃が密着している。唾を飲み込むだけで、刃先がぶすりと僕の首の皮を切り込んでしまいそうだった。僕は瞳だけを横へ動かして、哀子の顔を見た。哀子の虚ろな目とかち合った。

「私、やっぱり変かしら。こんなことを言うなんて、やっぱりおかしいのかしら。ねえ、私が変になったのって、誰のせい？ お母さん？ お父さん？ 先生？ クラスメイト？ それとも、草太？」

「……………」

声を出すのもままならない状況だった。虚ろな目は、徐々に陰悪になっていき、眉間をぴくぴく震わせ始めた。まるで、僕を一生恨み続けてきたような鋭い瞳で睨みつけてくる。狭い土管内のため、逃げ出すことも出来ず、僕はただ哀子の顔色を伺うことしか出来なかった。ぷつん、と、少し首筋に血が滲んだ。そして、哀子は僕の首筋からナイフを離し、ふう、と息を吐いた。哀子も相当緊張していたらしく、よくよく見ると額に汗が滲んでいた。僕は切れた皮膚を掌で覆い、一気に脱力した。哀子もぐったりとして膝を抱え、頭を膝に埋めた。そして小さな声で、ごめんなさい、と言った。

僕の中で、沢山の虫がざわざわ駆け巡っているような違和感がし

た。哀子のナイフはどうしてあそこまで錆びて、刃先もボロボロに欠けていたのだろう。僕の脳は、今起こっている殺人事件と哀子を結びつけようとしていた。もしかしたら、哀子が「少年リッパー」の名を語って殺人を起こしているとしたら、新聞記事を見て自信に満ちた言い方も納得がいく。殺害された人たちの傷はこのナイフと同じ型だと報道していた。僕たちの他に、このナイフと同じ者を持っている人物がいるのだろうか。僕たちに罪を被せようとしたとしても、使ったナイフの種類まで分かるのはおかしくないか。

哀子が、人を殺した？

「ねえ、草太」

「な、に……」

哀子は僕を見た。

「信じていた人が、殺人鬼だったらどうする？」

「な、何でそんなこと訊くんだよ」

僕はどきりとした。

「……前言っていたでしょ、女の人死んだって。あれ、草太が切った人よね？」

「それが？ あれは、ただ切り所が悪かったただけだ」

「でも、たとえ切り所が悪くて、殺す気がなかったんだとしても、殺人犯になったのよね。その時点で。もちろん、私も共犯だけど、私はそこまで深手を負わせた時の感触とか知らないし、それで草太が人を殺すことに快感を覚えてしまっても不思議はないと思うの」

「何が言いたいのか？」

一呼吸置いて、哀子は口を開いた。

「“少年リッパー”を語った殺人鬼って、草太なのかな、って思っただけ」

「何言ってるのさ。そんなわけないだろ？」

自分の手が異様に震え始めた。僕は慌てて手と手を擦り合わせて、

出来るだけ震えていることが分からないようにした。哀子はしばらく黙ったまま、僕の顔を凝視した後、ふっと笑みを浮かべて、

「そうね、そうよね。ごめんなさい、疑ってしまっ」

と、言った。僕も笑い返したが、頬が引きつり上手く笑えなかった。そう、まるで嘘を吐いた殺人鬼のように、僕の全筋肉が緊張していた。

第9章 解体

親愛なる「A I」へ

僕が見つかるのも時間の問題みたいだ。だけど、君がまだ辛そうだから、僕は捕まるわけにはいかない。君は知らないだろうね、僕がこんなことをしているのなんて。でもいいんだよ、君はいつも通りでいればいい。罪は全て僕に任せて。

愛しの「A I」へ

君が僕の隣でそっと独り言を呟いた。「あんたも殺されればいいのに」って。君の望みでも、それは出来ないんだ、ごめんよ。僕が殺されることはないんだ、ごめんよ。でも、君の目の前から、僕が消えればいいのだね？　それが望みなんだね？　それなら良い考えがあるよ。楽しみにしておいておくれ。きっと、君は泣いて喜ぶだろうから。

公園が解体され始めると、僕と哀子はその様子を眺めて過ごした。危ないから近くに寄らないでね、と注意されながらも、僕たちはそこでぼんやりと潰れていく僕たちの基地を名残惜しく見ていた。工事は五時まで続き、それが終わると大きなショベルが土管を見下ろして立っていた。この公園が潰れると、次には家が建つそうだ。

「これからどうしようか、私たちの基地」

「もう、いつそのことで縁を切ってしまうのか」

「……それもいいわね」

もう土管の姿が見えなくなった公園を、寂しそうに見つめて哀子は言った。お互いの縁が切れてしまうことに何の名残もなかった。ただ、お互いを利用して、自分の楽しみを作っていただけだ。友情も愛情も何もない。それはそれで、おかしい。じゃあ、僕たちはどんな情を相手に感じていたのだろうか。

「一人でも大丈夫？」

「いままでずっと独りだったもの、大丈夫よ。草太の方こそ、一人で大丈夫？」

「僕にはそれなりに友だちっていうのがあるからね。大丈夫だよ」

哀子は僕を見て笑んだ。

僕たちはそれからぱったりと会わなくなった。

「少年リッパー」を名乗る殺人鬼もその日からぱったりと犯行を止めた。

やはり、僕か哀子かのどちらかが殺人鬼だったのだろう。それでも僕は爽やかな気分だった。ほんの二ヶ月間の復讐遊びだったけれど、それなりに楽しめたし、当初の目的を果たすことも出来た。それだけで僕は満足だった。引き出しにしまったナイフを見るたびに今までの遊びが鮮明に脳裏に思い出され、僕に軽い目眩を起こさせるが、それは“普通の人間”に戻ってきたせいだろう。世間を騒がせた「少年リッパー」はもう死んだのだ。

公園も予定通りに潰れて、哀子とは一ヶ月ほど会わなかった。学校でも、先生の死がなかったかのようにみんなに笑顔が戻り、新任

の先生は、すぐに僕たちのクラスに馴染んだ。前までは「少年リッパ―」の信者並に語っていた洋平も連続殺人鬼の話は一切しなくなった。僕の生活は、哀子と会う前に戻ったのだ。僕は押入れの中でぼんやりと考え事をして、時に無性に傷を見たくて、自分の皮膚に刃をむけるけれど、それもまた元に戻ったというだけだ。

「だけど、そんな生活もすぐに潰れてしまった。ぐしゃりと音を立てて、ガラガラと崩れていった。もう終わったと思っていた「少年リッパ―」が復活したのだ。最初の頃はニュースでただの殺人事件として取り上げられていたが、次第に「少年リッパ―事件」と似ていることから、犯人は同一人物だと判断された。そのニュースを観て、真っ先に頭に浮かんだのは哀子の存在だった。「少年リッパ―」の犯行は徐々にエスカレートしていき、切り刻んだあと、死体の体の一部を持ち帰っていた。それは、耳だったり、舌だったり、指だったり、様々だった。少なくとも僕の家にはそんなものはない。だったら、やはり犯人は哀子と考えるのが筋だ。

殺人鬼が復活して、十体目の死体が出たとき、僕は哀子の家まで出向くことにした。あのおんぼろのアパートだ。

辺りに街灯がなく、アパートの周りは雑草だらけで、空き缶やチラシなどのゴミがあちこちに落ちていた。僕は階段を登り、「笹上」と標識のある部屋のドアの前にいった。新聞やチラシがポストに溜まっている。不思議なぐらい静まり返っていた。僕はしばらく悩み、インターホンに手をかけた。そのとき、中から何かが暴れる音がしがしゅんと物が割れる音と叫び声が響き渡った。僕は驚いてのぼした手を引っ込め、後ずさった。強く鳴る心臓を必死に抑えながら、震える足のせいで立っているのがやっとだった。逃げろ！と僕が僕に命令して、僕の足が階段の方へ向いたとき、ドアが勢いよく開いた。中から雑巾のようにボロボロになった哀子がお腹を抑えながら出てきた。哀子は玄関から一歩出てから、その場に崩れ落ち、倒

れてしまった。

僕は目を見開いてその様を見ていることしか出来なかった。すると、中から大人の女の人が出てきて、倒れている哀子の髪の毛を掴んで、人形のように持ち上げた。

どうしてそうしたのか今となっては分からないけれど、僕は無意識の内に、その女の人の首を切りつけ、哀子を担ぎ上げて走り出していた。こういうのを火事場の馬鹿力ということをするときに知った。それでも足は震えて、途中何度も転んだが、僕は走った。走っている最中、僕はずっと泣いていた。涙と鼻水と涎を垂らしながら無我夢中で走っていた。哀子の鼻から流れる鼻血が僕の首筋にたれてきたが、僕はとにかく必死に走った。

僕の足は自然と取り壊された公園の跡地へと向かった。立ち入り禁止と書かれた看板の立つ空き地へ入ると、僕の体力も底をつき、思い切り倒れてしまった。その拍子に哀子も投げ出された。僕の隣で、仰向けになって気絶する哀子を霞む視界の中見ていた。哀子はやはり至る所から血を流していた。僕は哀子と会う前までの普通の日常に戻ったけれど、哀子はいつもの通り、虐待される毎日を送っていたんだ。

「哀子……。哀子……」

哀子の頬を軽く叩きながら、哀子の名前を呼んだ。哀子は咳きこみながら顔を歪めて、目を覚ました。瞼を上げて、哀子の目は虚ろで、まだ意識がはっきりと戻っていないようだった。星のない空を見ながら哀子の脳が起きるのを待った。

「……草太？」

「うん」

僕は哀子の顔を上から覗き込んだ。すると、哀子は泣いた。泣い

て、泣いて、つられて僕もまた泣いた。

この復讐遊びが何の意味を果たしたんだろう、何で僕たちは泣いているんだろう、何も変わっていないじゃないか！

「どうして人は人を傷付けるのかなあ……」

「生きていくため……かな」

「じゃあ、私も人を傷付けて、恨まれて、生きていくことになるのか……」

「哀子は、人を殺したいと思ったことがある？」

「そんなこと、思う暇さえないわ」

哀子はずっと目を腕で覆っていた。僕は真っ暗な空をずっと見ていた。

「今、ナイフ持ってる？」

哀子はおもむろにポケットからナイフを取り出した。

「僕も持ってる。ねえ、一緒にこれ捨てちゃわない？」

哀子は黙って頷いた。

僕たちはナイフを空き地の隅に埋めた。全てをこのまま封印したかった。

埋め終えて、僕は哀子をどうすればいいか考えた。またあの家に帰すのは危ないだろうし、だからといって快適な場所があるわけでもない。夜になると大分冷えこむから外に放置するわけにもいかないだろう。

「……僕の家の中でもいい？」

哀子は笑って頷いた。

僕の憩いの場所だった押入れを哀子に与え、僕は普段通りの生活を行った。窮屈な生活だろうけれど、哀子は前の家よりも住み心地

がいいと言っている。僕たちはほとんど会話もせず、顔を合わせることも多くはなかった。食べる物をあげるときぐらいしか、僕から襖を開けることはなかった。

ある日、襖の奥から哀子が僕に話しかけてきた。

「あのね、考えたんだけど、どこか遠くに行かない？　いつか二人で」

「どこにそんなお金があるのさ」

僕が笑いながら言うと、哀子の声はそこで途絶えた。僕はベッドに寝転がりながら、天井を眺めて哀子の返事を待っていると、数分後、何かを思いついたらしい哀子が声を弾ませて、

「走って走って、疲れたら歩いて、それを繰り返していたら、いつか遠くに行けるよ」

「うん、いいアイディアだね。無一文で旅に出るのも悪くない。いっつ力尽きるか分からないけれどね」

「こういうのはどうかしら。私が死んだら、草太が哀しんで泣くの。草太が死んだら、私が哀しんで泣くの。そうすれば、死ぬのは怖くない」

「残された方は誰に泣いてもらうのさ」

僕は笑った。哀子は「ああ、そうか」と呟き、また沈黙した。僕は目を閉じて、そのまま眠りについた。哀子が僕を呼ぶ声が微かに聴こえた。

第10章 お母さん

ガシャンと受話器が手から滑り落ちた。受話器の向こう側から「もしもし？ ももしし？」と男の声がしたが、僕の頭の中には入ってはいなかった。

僕の母さんが殺されたらしい。

「君のお母さんがね、少年リッパーに殺されてしまったのだよ。死体は見るも無惨な姿で……。あ、いや、そう気を落とさないでくれ。ちゃんとおじさん達が犯人を捕まえてあげるから」

母さんが死んだ。死んだのか。ああ、そうか、殺されたのか。僕は電気の点いていない部屋の中で、ぶつぶつと独り言を呟いた。母さんは夜に仕事場へ行くのだから、少年リッパーに殺されてもおかしくはない。でも、何で少年リッパーは現れた？ ナイフはもう、僕らの手元にはないはずなのに。

母さんが死んだのは仕方がない。あの人はただの他人だ。死んだところで哀しむ必要なんてない。それよりも大事なのは、誰に殺されたのかということだ。

受話器を床に放置したまま、僕は押入れにいる哀子の所へ行った。そして、警察の人が言っていたことをそのまま伝えた。哀子は怪訝に眉を潜め、顔を強張らせた。

「お母さんが死んだの？」

今にも消え入りそうな声で言った。

「今はそんなことどうだっていいんだ！」

僕は哀子の肩を掴み、大きく揺さぶった。哀子は呆然としたまま、僕の顔を見ていた。

「何が？ 何がどうだっていいの？ それが一番問題なんじゃないの？」

「違う！ そんなことどうだっていい。僕が言いたいのは、誰が少年リッパーを名乗って殺人を犯しているのかだ！」

哀子は僕を化け物でも見るかのような目で見て、僕の名前を呟いた。その瞬間、僕は身震いをして、体が小刻みに震え出した。哀子は唇を噛みしめながら、僕を哀れむように見て、肩を掴む僕の手にソッと触れた。

「なんで……血が？」

「え……？」

僕は自分の手をゆっくりと目の前へ掲げた。暗い部屋の中でも分かる、赤い赤い血が僕の手にとりとついていた。僕は自信の掌と哀子の顔を交互に見つめながら、真っ白になってしまった頭をふらふらと停止寸前にさせながら、愕然とした。

「哀子……。僕が、母さんを殺したの？」

哀子は餌を待つ鯉のように口を開閉しながら、頬を上下に引きつけていた。僕はあることを思い出し、慌てて机の引き出しに手をかけた。無我夢中で引き出しを開けて、中を確認した。そこには血のついたナイフと、錆びたナイフが置いてあった。

「僕が、母さんを、殺した……」

僕の声が余韻を残して消えていく。一気に体中の力が抜け、僕はその場に崩れた。何も考えることが出来なかった。今にも警察がのりこんできて、僕を捕まえて行ってしまいうさだった。哀子は押入れの中から僕を見ていた。僕は、薄暗い天井を見ていた。

「草太、ねえ、逃げよ。逃げちゃおうよ。捕まる前に遠くへ逃げようよ」

「逃げてても、逃げてても、きっと捕まえに来る。僕を殺すために、みんなが僕を捕まえに来るよ」

ならばいつそのこと……。

僕は引き出しにぽつんと置いてあるナイフを手を取った。血のついたナイフを月光に当てて、喉元に刃先をつけた。

「それなら、自分で死ぬよ。そうすれば、可哀想な一家殺人事件の被害者ってことになって、哀しんでくれる人がいるかもしれない」

喉に刃先が食い込み、少し血が溢れた。僕はどうしてこんなに動揺しているのだろうか。死ぬのだって、捕まるのだって、恨まれるのだって、怖くなんてなかったはずなのに。自分で命を絶ってしまう方を選んでしまうほど、僕は何を恐れているんだ。それでも、僕は恐怖の渦に飲み込まれて、今にも息を止めて心臓を止めてしまいたくなる。

「待って！」

哀子が叫んだ。僕の手を叩き、ナイフを弾き飛ばした。ナイフは虚しく飛んでいき、少し回転した後、ぴたりと静止した。哀子は僕の顎を掴み、強引に上を向けさせ、首元をジッと観察した。息苦しくて声が出ない。しばらく凝視した後、哀子は僕の首筋に垂れる血液を指先で拭い取り、味見をするように口に含んだ。そして次に、僕の手が付いた血を指先でスーッと取り、舐めた。すると、いきなり咳き込みだし、鳴咽した後、にんまりした笑みを浮かべ、僕の肩を叩いた。

「大丈夫。これ、血じゃないみたい」

僕は慌てて、手についた血と喉に流れる血を舐めてみた。味は明らかに違った。

「絵の具……？」

僕と哀子は不安な面を合わせた。

すると、部屋のドアをノックする音と、ドアノブが下げられる音が響き、僕と哀子は同時にビクツと肩を揺らした。僕らは部屋のドアの方へ顔を向ける。ドアがスローモーションのように開いていく。ドアを見たまま、僕たちは固まった。ナイフすら手に握ることが出来ず、額に汗が滲んだ。唾を飲む音がしつかりと僕の耳に届いた。

「父さん……」

ドアの隙間から父さんの姿を見た。父さんは僕を冷ややかな目で見下ろし、その瞳には光りが灯ってはいなかった。

「父さん！ 大変なんだよ。母さんが……」

「ん？ 君はどこの子だい？ 人の家に勝手に上がりこんで」

僕は言葉を失った。今のセリフは哀子に向けられたものではない。父さんの目は僕を捕らえている。

「父さん……」

僕は父さんに手をのばした。久しぶりに見た父さんの顔はやつれていて、本当にこれが自分の父親だったか疑わしく思えた。でも、目の下にあるホクロは、僕の父さんと同じだ。

すると父さんは突如目を丸く見開き、眼球を血走らせながら、青筋を浮かべた。何事かと目を見張る僕の手を勢いよく掴みあげ「なんだ、この手は！ お前が母さんを殺したんだな！」と怒鳴り、僕の体をガクガクと何度も揺さぶりだした。そして、その痩せ細り、骨々とした手を僕の首に巻き、全体重を僕に落とした。急に息が通り道を失い、鳴咽も中途半端に出てきた。哀子に助けを求めようと掌で床を思いつきり何度も叩いたが、哀子の声も気配も感じられな

い。父さんの顔は、殺意に満ち溢れていた。恨んでいる、僕を。殺そうとしている、父さんが。哀子……。僕は横にいるはずの哀子へと閉じかけた目を向けた。そこに哀子の姿はなく、ただぼっかりと空間があるだけだった。

愕然としたら、僕の目は一瞬で閉じ、頭には「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ」と連呼してその二文字だけが並んでいた。

「あ……い……」

父さんの口から微かに漏れた「あい」という言葉。僕は父さんが哀子の名前を呼んだのかと思ったが、父さんは哀子の名前を知らない。

意識が飛ぶ瞬間に見えたのは、父さんの背後でナイフをかざす哀子の姿だった。

第11章 消滅

僕が目を覚ますと、僕の隣で倒れている父さんと、その隣で膝を抱えて蹲る哀子の姿が目に入った。

「哀子……」

哀子はナイフの刃先を床に突き立てて、くるくると弄くって遊んでいた。僕が手をのばすと、哀子は手を止めて、僕へと目線を移した。

「父さんは……？」

「……起きないの、さっきからずっと眠ったままよ」

「そう、起きないのか……」

うつ伏せだった体を起こすと、視界が一瞬揺れた。

「僕は、気付いていたんだ。だけど、認めたくなかった。父さんも母さんも、僕なんかいらなかったんだ。一パーセントだって、可能性なんかなかったのに」

今頃気付いた。父さんは母さんを、殺したいほど愛していたんだってことを。父さんの呟いた「あい」は母さんの名前だってことを。僕は、元々この二人の間には入り込むことなんて、出来なかったんだってことを。

「逃げようか……。二人で、遠くまで。ずっとずっと、遠くまで。逃げよう」

哀子は幸せそうな笑みを浮かべて、大きくはつきりと頷いた。それは、もう僕たちには戻る場所がなくなったことを意味していた。

僕はナイフをポケットに入れた。親の財布からお金を取り出して、

それもポケットに入れた。時はすでに夜中の二時だった。自転車に二人で乗って、僕は必死にペダルをこいだ。ずっとずっとこぎ続けた。哀子は僕の腰に腕を回して、僕のあげたブルーベリー味のガムを噛んでいた。途中、僕の手は震えた。目は霞んだ。鼻は詰まった。喉は痛かった。星はない。月が独りぼっちで朧げにぼつんと浮かんでいた。無我夢中であてもなくこぎ続けると、人気の全く感じない田舎道へと着いた。

空には星が生まれた。僕たちはそこで自転車から降りて、草むらの上に仰向けに寝転んだ。辺りはとても静かだった。

「ねえ、哀子は僕のこと、信じてる？」

「もちろんよ。神様よりも、信じてる」

「僕も、信じてる」

哀子は僕の手を握り、目を閉じて呟いた。

「言ってなかったけど、私、本当はね……」

僕は、知ってたよ、と答えた。

後日、新聞には僕の母と父の名前が載っていた。父さんのパソコンには、母さんに宛てたであろうメッセージがいくつも保存されていた。そして、机の引き出しには腐敗した死体の破片が押し込められていたようだ。父さんは哀子に切りつけられたが、病院で一命をとりとめ、医師の診断より精神不安定と診断された。それでも父さんは、母さんを殺したのは「少年リッパー」だと主張し続けたそうだ。息子の僕の存在は、消されていた。そして、哀子の存在も。

僕は、ナイフを持っている。

今でも少し、僕の癖が僕の道を邪魔する。

もう、気にしないでおう。

僕には、失うものなんてないのだから。

そう、だから、たまにナイフに血がついているけれど、それはきつと……。

「君、こんな夜中に一人で何をしているんだい？」

「僕には、哀子がいいますから。一人ではないです」

僕を怪訝に見つめ返す大人を僕は気に食わなくて切る。

そう、これからもずっと哀子と二人で。

この「復讐遊び」は僕が大人になり、最後の一人を刺して終わるのだ。

エピソード

男の背後に人の気配がした。男はゆっくりと振り返り、自身の背後に立つ人物を見た。男はしばらく黙した後、思い出したように目を大きく見開いた。

「洋平……？」

「よ、久しぶり」

洋平と呼ばれた男は、金髪で、耳には数個のピアスがしてあった。陽気に笑みを浮かべる洋平を男は気まずそうに見ながら、久しぶり、とぼそりと呟いた。

「いつ帰って来たんだ？」

「ついさっき……」

洋平は、そうかそうか、と怪しく微笑を浮かべながら、男に近づき肩を軽く叩いた。

「今から飲みに行かないか？ 昔話でもしようぜ」

「いや、止しておくよ。すぐにまた違うところへ行くから」

男はそう呟いて、慌しい足取りでその場を去ろうとした。しかし、洋平に腕を掴まれ、足を進めることが出来なかった。

「お前、今十九か？」

「……そうだけど」

「いつ二十歳になる？」

「今月の二十一日に」

「そうか、そうなると来週でお前も大人の仲間入りってわけか」

洋平は頭を掻きながら、口角を吊り上げて言った。男の顔色が徐々に青白く変色しだし、額にじんわりと汗が滲み出す。

「覚えているか？ 六年前の事件。今この付近でまた発生してるんだぜ？ それも、あのときと同じで大人ばかりを狙った無差別殺人事件がさ」

男には人一倍、その事件には覚えがあった。

洋平がその殺人鬼を「正義」と讃えたこと。担任の先生が被害に合い、殺されてしまったこと。そして、その犯人の正体も。

さき程まで緊迫していた男だったが、ふと表情を変えた。今にも舌打ちをして洋平に殴りかかりそうな剣幕になり、それでいて瞳に光りが宿っていなかった。男の無造作に伸びた髪を突風が揺さぶり、乾いた土から砂埃が舞い上がった。

洋平はポケットに入れていた両手を出した。

「俺は六年前からずっと考えていたんだ。先生は一体誰を見たのかって……。それがずっと頭の中に残っててさ、あのときは単なる噂だと思っていたけど、もしかしたら本当に先生は犯人を見たんじゃないかって。それも、先生が見た犯人は……自分のうけ持っていたクラスの生徒……」

男は俯いたまま、静かに洋平の話聞いていた。土で汚れた掌を指先でなぞりながら、弄くっていた。

「少年リッパーって、お前なんだろう？」

ゆっくりと頭を上げた男は、不適に笑みを浮かべ、声をあげて笑いだした。男は、汚れた髪の毛をバサバサ掻き、それがどうした、と呟き、ポケットに手を突っ込んだ。

洋平は唇を噛みしめ、眉間に皺をいくつも作った。

「洋平は、いつ大人になるの？」

「……………今月だ」

洋平の額を汗が一筋伝う。

洋平の手に握られた小型ナイフに、彼の姿が反射し映し出される。惨めなほど、動揺した表情を引きつらせていた。

「この辺で最近起きている事件……。洋平が犯人なの？ 六年前の僕に憧れて、洋平は僕になりたがっているんだね。可哀想に」

洋平の手は小刻みに震え始め、男はそれを冷ややかに見つめた。そして、ポケットから手を出す。そこには六年もの間、何十人もの大人の血を吸い続けたナイフが握られていた。

「洋平、君は見落としていたようだけど、僕はナイフを二本所持しているんだよ。僕がナイフを埋めたのを見て、声を掛けたんだろうけど、残念だったね」

先に大人になる方が、犠牲になるっていうのはどう？ そう言つて、男はにんまりと口角を吊り上げて笑んだ。洋平もそれに同意し、お互い握りしめたナイフを構えた。

ひとつの男の死体がある。

それはこれでもかというほど切り込まれ、元々公園だった土地の、土管があつた場所に棄てられていた。

どこから生まれた喜びなのか、男の表情は晴れやかだった。

その死体はまるで、全ての悲しみから抜け出せたように、幸せそうに笑みを浮かべていたそうだ。

エピローグ（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございました。これで「美しい鼻血」は終わりです（^^）

次回はもって明るいお話を書きたいです。

2007. 10. 23. 子々

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8426c/>

美しい鼻血

2010年10月11日20時05分発行